Research Monograph Series

共存在と色気の生成論
壁・画面・フェティッシュ・曼荼羅を通じた信頼と気づきのインターフェイス

A Generative Theory of Co-Being and Iroke: Interfaces of Trust and Awareness through Walls, Screens, Fetish, and Mandala

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

A Generative Theory of Co-Being and Iroke:
Interfaces of Trust and Awareness through Walls, Screens, Fetish, and Mandala

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、美学者母が展開してきた生成学および生成の位相存在論を基礎として、「存在」と「共存在」の差異を、「在るが在る」「無いが無い」「無いが在る」「在るが無い」という四つの存在様態から再構成する。近代的認識は、現前し測定可能なものを「在るが在る」として承認し、不可視・遠隔・不在のものを「無いが無い」として排除する傾向を持つ。しかし実際の現在は、不在のものが関係として作用する「無いが在る」と、現前しているものが生きられた関係として現れない「在るが無い」との重なりから生成する。本論文は、この重なりを共存在的現在と呼ぶ。

部屋の壁は、この問題を示す最小模型である。壁の向こう側には他者や事物が在るにもかかわらず、知覚されないため現在から脱落する。一方、デジタル画面上の銀行残高、映像、写真、評価値は、現実そのものではなく制度的・技術的関係の表示であるにもかかわらず、強い確実性を帯びる。ここでは、見えない現実への信頼が衰え、可視化された記号への信用が現実感を代替する。本論文は、この反転を、非局所的な関係の力を局所的対象の固有性へ帰属させるフェティッシュ化として分析する。

さらに本論文は、作品性（Workhood）を作品が所有する魅力ではなく、作品、身体、場所、時間、不在のもののあいだに生じる非局所的な感性的引力として定義する。この引力が、理由に先立って身体を惹きつけ、惹かれている自己への気づきを生むとき、それは「色気」として現れる。色気は性的内容ではなく、性の魅力と同じく、対象へ完全には局在しない関係的生成力である。

最後に、真言密教の曼荼羅と阿字観を、像の内部へ力を閉じ込める偶像とは異なり、局所的な印を通して非局所的な法界へ参与させるインターフェイスとして検討する。局所化は、それ自体では誤りではない。局所化が自らの境界を忘れたとき、フェティッシュと偶像が成立する。局所化が非局所的な関係へ再び開かれるとき、それは印、曼荼羅、作品、インターフェイスとなる。芸術の役割は失われた感覚を復元することではなく、感じることへの信頼を再生成する契機を設計することにある。

キーワード

生成学、生成の位相存在論、共存在、Co-Being、インターフェイス、信頼、信用、壁、デジタル画面、作品性、Workhood、色気、フェティッシュ、偶像、曼荼羅、阿字観、気づき、現実接地

目次

Contents

方法論的注意 1

1 生成学における存在と共存在 2

2 四つの存在様態と閉鎖の論理 3

3 現実の壁とデジタル画面 4

4 信頼と信用、感じることへの信頼 5

5 作品性、性的な引力、色気 6

6 フェティッシュと偶像、局所化の忘却 7

7 曼荼羅と阿字観というインターフェイス 8

8 気づきとしての芸術と民宿狭山美学校 9

9 考察 回復ではなく再生成 10

結論 11

参考文献 12

方法論的声明 14

方法論的注意

本論文は、存在論、美学、メディア論、宗教哲学を横断する理論研究である。「非局所性」は量子物理学上の非局所性を社会や芸術へ直接適用する語ではなく、存在の意味と作用が物理的な位置だけでは完結せず、遠隔、過去、未来、他者、記憶、制度との関係によって生成することを示す存在論的概念として用いる。

また、ひきこもりへの言及は、医学的診断や単一原因論を提示するものではない。社会的撤退には個別の心理的、家族的、経済的、制度的条件がある。本論文が示すのは、共存在的信頼の喪失という一つの位相的構造であり、当事者に原因や責任を帰属させるものではない。

さらに、曼荼羅や阿字観を生成学のインターフェイス概念と比較することは、真言密教を生成学へ還元することでも、両者の教義的同一性を主張することでもない。比較されるのは、局所的な印、身体的実践、不可視の全体、参与者の変容を接続する構造である。

1　生成学における存在と共存在

生成学は、存在するものを固定的に分類するのではなく、存在がいかに生成するかを問う。その基礎理論である生成の位相存在論において、存在は孤立した実体ではなく、自己、自己以外、環境の関係から生成する接続可能性である。存在は局所的に現れるが、その意味と作用は局所に閉じない。存在は、生成の一時的な安定であり、同時に次の接続へ開かれた非完結的構造である（Tanaka 2026a）。

「存在」は、生成学的には縦方向の持続を持つ。「存」は、過去から現在、現在から未来へ、変化を引き受けながら継承される働きである。「在」は、その持続が身体、場所、出来事へ現実接地し、いま・ここに位を取ることである。これに対し「共」は、完成した複数の存在者の並置ではない。それは、差異を消さずに同じ現在を分有し、互いの存在様態を変化させる横方向の関係である。ゆえに共存在（Co-Being）は、存在者が後から関係を結ぶ状態ではなく、関係を通じてそれぞれが存在する生成条件である（Tanaka 2026b）。

ここでいう「共に」は、同じ物理的位置にいることに限定されない。遠方の他者、死者、記憶、未来、自然、まだ名づけられていない何かが、直接現前しなくても現在へ作用しうる。共存在は、場を通した同時間的かつ非局所的な「今の全体」である。これに対し、通常の存在理解は、同じ場所において時間を通して持続する局所的な部分を捉える。現在は両者の交点であり、時計上の瞬間ではなく、局所的な身体が非局所的な関係へ応答するインターフェイスである。

2　四つの存在様態と閉鎖の論理

本論文は、現在を四つの存在様態から記述する。

第一の「在るが在る」は、現前しているものを存在として肯定する様態である。第二の「無いが無い」は、現前していないものを存在から排除する様態である。この二つは、「在るものは在る」「無いものは無い」という自己同一的な閉鎖を形成する。これは対象を同定し、局所的な因果を確定するうえで不可欠である。しかし、それだけで世界を構成すると、不可視の関係、潜在的可能性、不在者の作用は現実から除外される。

第三の「無いが在る」は、物理的には現前していないものが関係として現在へ作用する様態である。壁の向こう側の他者、死者の記憶、未来への予期、空席に残る身体の痕跡は、この様態に属する。第四の「在るが無い」は、身体的または制度的には存在しているにもかかわらず、応答可能な関係としては現れていない様態である。人が生活し、情報へ接続し、制度に登録されていても、生きている実感や他者からの応答を持てないとき、存在は「在るが無い」ものとなる。

現実の現在は、前二者だけではなく、後二者の重なりによって成立する。「無いが在る」と「在るが無い」は論理的欠陥ではない。それらは「非」の働きである。生成学における非は、単なる否定や排除ではなく、自己同一性を外部へ開き、差異を保持したまま別の位相と重ならせるインターフェイスである。したがって現代の行き詰まりは、「在るが在る／無いが無い」という二値的閉鎖によって、「無いが在る／在るが無い」という生成的重なりが知覚できなくなったことにある。

3　現実の壁とデジタル画面

部屋の壁は、局所性と非局所性の関係を示す最小模型である。部屋にいる身体にとって、壁は内部と外部を分け、局所的な「ここ」を成立させる。しかし壁の向こう側には、他者、建物、道路、空気、生活が続いている。向こう側が見えないことと、存在しないことは同じではない。それにもかかわらず、無自覚な知覚は、見えないものを現在から脱落させる。

壁は遮断物であると同時にインターフェイスである。外部の音、光、温度、振動、通信は壁を通して内部へ作用する。壁は「あちら」と「こちら」を分けながら接続する。共存在とは壁を消去することではなく、向こう側が見えないまま、自分と同じ現在に参与していると感じることである。

デジタル画面では逆のことが起きる。銀行残高、写真、動画、ニュース、評価値は、現実そのものではなく、選択、計算、撮影、編集、制度、通信によって生成された表示である。しかし、見えるという理由によって、壁の向こう側の現実よりも強い確実性を持つ。現実に在るが見えないものは信じられず、直接には触れられないが画面に表示されたものは信じられる。

銀行残高は虚偽ではない。それは帳簿、法、銀行制度、決済網、労働、国家的保証への請求を圧縮した実効的記号であり、生活を現実に方向づける。しかし、その数値を関係の表示ではなく富そのものとみなすとき、インターフェイスは偶像へ近づく。画面の危険は、虚偽を表示することだけではない。表示が成立する背後の関係と、表示されなかった外部を隠したまま、自らを現実そのものとして現すことにある。

4　信頼と信用、感じることへの信頼

本論文では、信頼と信用を概念的に区別する。信用は、履歴、数値、証明、制度、再現可能性によって、条件つきで判断される。信頼は、完全には確認できない他者や世界との関係を、それでも引き受けることである。この区別は、社会学における trust と confidence の議論と接点を持つが（Luhmann 1979）、ここでは生成学独自の存在論的区別として用いる。

感じるとは、単なる気分ではない。それは、直接には見えない自己以外から作用を受け、自らの位置が動かされていることを受け取る働きである。感じることへの信頼とは、その作用が完全には証明されなくても、現実との接続として引き受けることである。近代的な科学主義とデジタルな評価環境は、測定可能な信用を拡大する一方、測定以前の信頼を主観的で不確実なものとして退けやすい。その結果、人間や場所への信頼が衰え、画面、数値、制度への信用が現実感を代替する。

この構造は、共存在的現在の喪失をもたらす。見えない他者を感じられず、感じたことを信頼できず、自己の感覚そのものを疑うとき、壁は分けながら接続する境界ではなく完全な断絶になる。社会的撤退やひきこもりの一部は、この観点から、世界が応答可能な外部として感じられなくなったときに形成される防御的な「納まり」として考察できる。ただし、これは臨床的な原因論ではなく、社会的撤退に含まれうる存在論的構造の記述である（Saitō 2013; Teo 2010）。

人類が画面以前の感覚へそのまま戻ることはできない。生成は不可逆的だからである。しかし、失われた感覚を復元できないことと、感じる力を再生成できないことは同じではない。取り違えへの自覚は、知識の追加ではなく位相転換の契機となる。「画面上の表示は現実そのものではなく一つの接続である」「見えない他者は不在ではない」と気づくとき、世界との接続の仕方が変わり始める。

5　作品性、性的な引力、色気

美学者母の芸術において、作品は意味を収納した対象ではない。作品は、見る者が自らの知覚の境界と、すでに世界へ応答していた身体に気づくための契機である。したがって作品性（Workhood）は、完成した物体が所有する属性ではない。作品、鑑賞者、場所、時間、記憶、不在が接続し、存在の位相転換が生じるときに生成する関係的構造である。これは、作品を作者の所有物から文化生成の開かれた条件へ移す無名性の理論とも整合する（Tanaka 2026c）。

作品性は、この意味で「性的」である。ただし、それは性的表象や性欲への還元を意味しない。性の魅力は、多くの場合、対象を分析してから生じるのではない。人は先に惹かれ、その後で理由を構成する。しかも魅力は、相手の身体だけに局在せず、距離、声、気配、時間、記憶、未知、禁制、期待などの重なりから生じる。作品性も同じく、対象へ完全には局在しない引力として働く。

この引力を、本論文は「色気」と呼ぶ。色気は、形の完全な現前ではなく、見えているものと見えていないもの、近さと届かなさ、在るものと無いものの重なりから生じる。美しさが対象の形式として評価されうるのに対し、色気は自己と自己以外との「あいだ」に生成する。色気とは、「無いが在る」と「在るが無い」が身体において交差する感性的な力である（Tanaka 2026d）。

したがって鑑賞者が気づくのは、作品に隠された正解ではない。自分が理由に先立って何かへ惹かれ、すでに自己以外から作用を受けていたことである。作品は気づきを伝達しない。作品は、気づきが生じうる空席を残す。即時に理解されなくても、後に壁の向こう側を意識し、画面上の数字の前で立ち止まるなら、その遅延した変化も作品性の時間に含まれる。

6　フェティッシュと偶像、局所化の忘却

非局所的な関係は、そのままでは所有、比較、保存、交換が困難である。人間は、関係の場から生じた力を、物、像、身体、名称、数字へ局所化することで確かさを得る。この操作は、複雑な世界を行為可能な形へ圧縮するために必要である。問題は局所化そのものではなく、局所化したという事実が忘れられることである。

フェティッシュ化とは、関係から生成した力を、対象が本来的に所有する力として受け取ることである。マルクスの商品フェティシズム論が示すように、社会的関係は物と物との関係として現れうる（Marx 1976）。生成学はこの構造を、貨幣だけでなく、作品価値、ブランド、性的イメージ、評価数、権威、画面上の可視性へ拡張して捉える。ただしフェティッシュは、必ずしも否定されるべき物ではない。身体の不在や時間の堆積が、特定の断片や印へ凝縮されることで、失われた関係が再び感じられる場合もある。

ここから、閉鎖的フェティッシュと生成的フェティッシュを区別できる。閉鎖的フェティッシュは、力を対象の内部へ閉じ込め、その背後の関係を忘れさせる。生成的フェティッシュは、局所的な物を通して、その物に還元できない身体、時間、場所、他者へ接続を開く。前者が偶像化へ向かうのに対し、後者は印またはインターフェイスへ向かう。

偶像とは、像が存在することではなく、像を力の最終的な所在とみなすことである。印は、対象を通して向こう側を開く。偶像は、向こう側を対象の内部へ閉じ込める。画面上の数値や映像も、それが関係への入口である限りインターフェイスであるが、表示が現実の全体を代替したとき偶像となる。

7　曼荼羅と阿字観というインターフェイス

真言密教の曼荼羅は、大日如来と諸尊を単に並べた宗教画ではなく、相互関係として構成された法界を視覚的・儀礼的に現成させる。両界曼荼羅は、『大日経』と『金剛頂経』に関わる理と智の構造を、中心と周縁、差異と相互包摂の配置として示す（Kiyota 1987; Abé 1999）。この意味で、曼荼羅は世界の複製というより、参与者が世界との関係を組み替えるための実践的配置である。

阿字観における阿字も、文字そのものを最終対象として所有するための像ではない。月輪、蓮華、阿字を前に、姿勢、呼吸、視覚、声、意識を組織することで、局所的な身体と大日如来、法界、無生の意味が接続される（Yamasaki 1988）。阿字は小さな局所的な印である。しかし、その局所性は全体を内部へ閉じ込めるのではなく、実践者を非局所的な関係の全体へ参与させる入口となる。

したがって、生成学から見れば、阿字観はインターフェイスの比喩ではなく、インターフェイスそのものである。実践者は阿字を外部から観察するだけではない。阿字、身体、呼吸、場所、伝承の関係へ入り、その接続によって自己の位相を変える。像の前に主体が不変のまま残るなら、それは表象の消費にとどまる。像との接触によって見る者と見られるものの関係が変化するとき、インターフェイスが成立する。

ただし、特定の宗教像が本質的に偶像であり、曼荼羅が本質的に非偶像であると分類することはできない。同じ曼荼羅も、所有、権威、希少価値だけへ閉じられればフェティッシュ化されうる。逆に一つの像も、その向こう側へ関係を開く実践の中ではインターフェイスとなりうる。区別を決めるのは形態ではなく、局所化が閉じるか、再び開くかという作動である。

8　気づきとしての芸術と民宿狭山美学校

美学者母は、自覚、気づきのきっかけ、すなわち契機を作品としている。ここで契機とは、作品が情報として教える内容ではない。それは、見る者が自らの知覚と信頼の配置に気づき、世界との接続を変え始める出来事である。芸術は答えを与えるのではなく、答えを求めていた自己の位相を現す。

この作品概念が一般に理解されにくいのは、現代の芸術制度が可視的な対象、作者の意図、説明可能な意味、市場価値、評価可能な効果を求めるからである。さらに、気づきの契機を受け取る感覚そのものが、画面と数値への信用によって弱められている。しかし、理解されないことを作品の正しさの証明にしてはならない。そうすれば理論は反証不能な閉鎖になる。作品の課題は、感覚を失った者を排除することではなく、感じられなくなった状態そのものに最小の違和感、余白、応答可能性をつくることである。

民宿狭山美学校は、この意味で長期的なインターフェイス芸術である。宿泊施設、生活空間、研究拠点、作品という異なる位相を一つへ同一化せず、あちら／こちら、客／生活者、日常／芸術、内部／外部の境界を可動化する。建物の壁は作品を展示する背景ではない。壁、部屋、滞在、会話、沈黙、時間そのものが、見えない他者との共存在を感じるための座と席を形成する。

この実践における作品は、「在るが在る」完成物ではない。何もないように見える空席から、それまで現在に含まれていなかった関係が現れるとき、作品性が生成する。色気は、その空席が身体を惹きつける力であり、気づきは、惹かれていた自己が自己に現れる出来事である。

9　考察　回復ではなく再生成

現代人は、壁の向こう側の実在を感じにくくなりながら、デジタルな壁の表面を世界として信じている。この反転は、技術だけの問題ではない。それは、感覚より表示を、信頼より信用を、関係より局所化された対象を確実とみなす長い認識史の帰結である。画面を廃棄すれば解決するわけではない。画面もまた、境界と外部を自覚させるならインターフェイスになりうる。

必要なのは、局所性を否定して無境界な全体へ戻ることではない。局所的な身体、物、像、数値がなければ、非局所的な関係は現実接地できない。他方、それらを最終的な実体とすれば、関係は偶像の内部へ閉じる。生成学が求めるのは、局所化と非局所化の循環である。印は関係を局所化し、即は身体を印へ接触させ、位を生成し、非は成立した位を再び外部へ開く。

この循環は、感じることへの信頼を再生成する。かつての共同体や画面以前の感覚へ回帰することはできない。同じ感覚は取り戻せない。しかし、取り戻せなさへの自覚を契機として、画面を知った身体が、新しい仕方で壁の向こう側、他者、不在、未来へ応答することはできる。

結論

本論文は、共存在的現在を「無いが在る」と「在るが無い」の重なりとして定義した。「在るが在る／無いが無い」は局所的同定に必要であるが、それだけで世界を閉じれば、見えない他者は現在から排除され、現前する自己も生きられた存在として現れなくなる。共存在の喪失は、最終的に自己存在への不信を生む。

現実の壁は、向こう側を隠しながら、その実在を残す。デジタル画面は、向こう側を見せながら、その外部を隠す。この違いを忘れると、信頼は信用へ、関係は表示へ、世界は画面へ置き換えられる。フェティッシュと偶像は、非局所的な関係の力を局所的対象へ帰属させ、その局所化を忘れることで成立する。

これに対し、曼荼羅、阿字観、作品、民宿狭山美学校は、局所的な形を消去せず、その形を非局所的な関係へ開くインターフェイスとして理解できる。作品性は物体の魅力ではなく、その接続において生じる色気である。色気とは、理由に先立って身体を惹きつけ、自分がすでに世界へ応答していたことに気づかせる感性的生成力である。

したがって、美学者母の芸術は、失われた感覚を表現するものでも、過去の感覚を復元するものでもない。それは、感覚を失っていたことへの自覚を生成し、感じることへの信頼を新たに組み直す契機の設計である。

> 芸術とは、見えないものを見える対象へ変えることではない。見えないものが見えないまま現在へ作用していることを感じ、その感じを再び信頼するための席を開くことである。

参考文献

Abé, Ryūichi. The Weaving of Mantra: Kūkai and the Construction of Esoteric Buddhist Discourse. New York: Columbia University Press, 1999.

Baudrillard, Jean. Simulacra and Simulation. Translated by Sheila Faria Glaser. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1994.

Flusser, Vilém. Towards a Philosophy of Photography. London: Reaktion Books, 2000.

Freud, Sigmund. “Fetishism.” In The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Vol. 21, translated and edited by James Strachey, 149–157. London: Hogarth Press, 1961. Originally published 1927.

Hakeda, Yoshito S., trans. Kūkai: Major Works. New York: Columbia University Press, 1972.

Heidegger, Martin. Being and Time. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. Oxford: Blackwell, 1962.

Kiyota, Minoru. Shingon Buddhism: Theory and Practice. Los Angeles: Buddhist Books International, 1978.

Kiyota, Minoru. “Shingon Mikkyō’s Twofold Maṇḍala: Paradoxes and Integration.” Journal of the International Association of Buddhist Studies 10, no. 1 (1987): 91–116.

Luhmann, Niklas. Trust and Power. Chichester: Wiley, 1979.

Marx, Karl. Capital: A Critique of Political Economy. Vol. 1. Translated by Ben Fowkes. Harmondsworth: Penguin, 1976.

Merleau-Ponty, Maurice. Phenomenology of Perception. Translated by Donald A. Landes. London: Routledge, 2012.

Saitō, Tamaki. Hikikomori: Adolescence without End. Translated by Jeffrey Angles. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2013.

Teo, Alan R. “A New Form of Social Withdrawal in Japan: A Review of Hikikomori.” International Journal of Social Psychiatry 56, no. 2 (2010): 178–185.

Varela, Francisco J., Evan Thompson, and Eleanor Rosch. The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience. Cambridge, MA: MIT Press, 1991.

Whitehead, Alfred North. Process and Reality: An Essay in Cosmology. Corrected edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne. New York: Free Press, 1978.

Winnicott, D. W. Playing and Reality. London: Tavistock, 1971.

Yamasaki, Taikō. Shingon: Japanese Esoteric Buddhism. Translated and adapted by Richard and Cynthia Peterson. Boston: Shambhala, 1988.

Tanaka, Tomokazu（美学者母）. 『生成の位相存在論の公理系——存在生成の基礎理論——』Research Monograph, Version 1.0, 2026a.

———. 『共存在の生成論——縦軸としての存在、横軸としての共感覚、そして失われた現在——』Research Memorandum, Version 1.0, 2026b.

———. 『無名性の存在論——生成の位相存在論における作品性・神聖性・文化生成——』Research Memorandum, Version 1.0, 2026c.

———. 『空席の力と色気の生成論——フェティッシュ・縮尺・余白・時空間的インターフェイスの美学——』Research Memorandum, 2026d.

———. 『即座の生成論——即・座・席・位・無名性・文化生成——』Research Memorandum, 2026e.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。